

## 編集後記

このたび、みなさまのご協力により、尚綱学院大学紀要第80号を発行できましたことを、心より御礼申し上げます。本号では、論文2編、研究ノート2編、書評2編を掲載いたしました。ご執筆頂きました先生方、査読の労を費やして下さった方々に、厚く感謝申し上げます。

私事ですが、院生の時に友人に誘われ、大学ラグビーの対抗戦を観戦しました。昨年その半分忘れていたラグビー熱に火が付いた。もちろんワールドカップラグビー日本大会です。各チームの華麗なスピードと集中力、破壊力は見ているとほれほれとするものでした。まして、日本が悲願の8強入りを果たしたのですから、興奮しました。そして「ワン・チーム」という言葉が印象に残ったのです。

複数の国からの多様な出自の人々が一つのチームとなり、共通の目的のために全力をつくすのを目の当たりにして、なぜ日本はこのような多民族国家になりえないのだろうか、疑問に思いました。日本居住を望む難民の中で、認定されるのはわずか0.2～0.4%であるといえます。また外国人技能実習生の就業中の事故率の高さ、最長5年の実習の後は自国に戻ることが前提であることなど、まだ日本は鎖国の夢を見ているようです。もちろん移民の受け入れには社会的、文化的な問題点が多いだろうことは現在のヨーロッパを見れば予想できます。しかし、もう夢から覚めて、これまでの日本人という概念を再考しても良い時期のように思えてなりませんでした。 閑話休題。

紀要への投稿は、随時受け付けております。投稿を希望される方は、本学図書館より所定の資料をお受け取りになられ、「紀要執筆要項」ならびに「尚綱学院大学『紀要』投稿規程」に従い、完成原稿をご用意いただき、図書館カウンターにご提出ください。投稿から掲載までかなりの時間を要する場合がありますが、2021年3月31日（水曜日）16時までにお預かりした原稿に関しては、第81号（2021年7月発行予定）への掲載候補原稿として、直ちに査読作業に入らせていただきます。

次号では、特集を掲載いたします。第79号では、尚綱とキリスト教をテーマに、筆者の選に良きを与えてなかなか充実した誌面であったと自負しています。今後執筆をご依頼する先生方には、お時間を取らせてしまうことにはなりますが、どうぞご協力を頂きたいと存じます。皆様には紀要という独立した研究媒体の意義をあらためてご理解いただき、本誌への投稿をいただけますよう重ねてお願い申し上げます。

紀要編集委員長 小原 俊文

### 尚綱学院大学『紀要』編集委員会

○小原 俊文    一條 玲香    菊池 哲彦    杉山 芳宏  
(○紀要編集委員長)